

広島俳句倶楽部

令和三年五月作品集

日浦山・岩瀧山春景 井藤希

家の近くに二つの小ぶりを山が並んでいる。標高三百五十メートル弱の日浦山と二百メートル弱の岩瀧山である。山麓には学校や古い寺社が点在し、日浦山には南北朝時代に南朝方の城があったという。中腹は岩や木立が多くまた、短いが変化に富んだ登山道を上ってゆくと広島市内や広島湾が一望できる場所があるなど、歩くのがまことに面白い山である。

日々暖かくなるこの季節に山中を歩いていると、木々の芽吹や鳥たちの声が確かな春を感じさせてくれ、うれしい気分になる。

春の山電車の音の届きたる

峠道をやうやう登り春の風

蝶々の近づいてゆく天狗岩

草萌ゆる南北朝の城の跡

街騒の遠く聞こゆる春の山

春望や海に架かれる橋あまた

岩瀧の社へと飛ぶ桜かな

山道を下る木立に囁りぬ

うららかや山を下りて薬師寺へ

ひと雲の春天に飛ぶ日浦山

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

「日浦山・岩瀧山春景」は、作者が春の山を歩きながら句を詠まれている様子が瞭に浮かぶような作品集です。近隣の山が歴史の中で重要な所であったことも、その親しみと楽しみを一層深めていることが伝わってきます。

峠道をやうやう登り春の風

険しい山道を登り終え、眺望も開けた。少し疲れた体には、春の風が一段と気持ちよく吹き抜ける。爽やかな一句である。

山道を下る木立に囁りぬ

下りは自然に足が早くなる。囁りが聞こえて思わず立ち止まり、囁りの聞こえてきた木立に鳥の姿を探す。鳥の音が聞こえるようだ。

ひと雲の春天に飛ぶ日浦山

山頂に来て見上げれば、明るい空に雲が飛ぶように流れている。山の名前を置くことで、作者の山への愛着と今日の山登りの楽しさがよく伝わってくる。「春天」の季語が光っている。

俳句との出会い

大橋博子

忙しい月日が終り、しきりに手を洗う自分に気がついたとき、外に出て話してみよう、寄り添ってみよう、そんなことを思った頃でした。声を掛けていたのが俳句です。それも一年くらいで止めたのですが、あらためて出掛けて行き、佐保先生の生徒になりました。川辺、小高い山を一応、俳句気分ですり歩いておりましたが、もの捉え方は一筋縄ではいかないようです。自分らしく、自分のものになるまでには思っています。

花ごぶし石のベンチに影やはし

春時雨ビロードのごと苔むして

玄関に能面かけ風信子

春の雲堤の石は椅子となり

ふいの音させ春林の鳥立てり

春の風自転車で行くゴッホ展

服を干す竿の先には夏の雲

走り根を踏んで上りぬ青景風

雲の峰石堀つづく港町

敬老の日いちようらいを着て行きぬ

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

「俳句との出会い」は、これまでの作者の句の中から、自分らしさを大切にして選ばれたものと拝見しました。川辺や山を歩いて鳥の音に驚いたり、自転車に乗ったりする作者の楽しそうな様子が目に浮かび、その喜びが作品集からあふれ出ているようです。

春の風自転車で行くゴッホ展

ゴッホの描く明るい緑色の風景の中を、作者が自転車を漕いでいる姿を想像した。展覧会を楽しみにしている気持ちが伝わってくる。服を干す竿の先には夏の雲

洗い物を干しているとその向こうに大きな雲が見える。何気ない暮らしを句にして、季語「夏の雲」が生き生きとしている。

敬老の日いちようらいを着て行きぬ

「いちようらい」という飾らない言葉が、敬老の日を単なる行事ではなく、作者が主体となった鮮やかな一日にした。

佐保光俊

人の名を花の向うに呼んでをり
散つてゆく花に聞こゆる人の声

村上正人

大蛇の飛び移るごと花の揺れ
尾道の沖を漂ひ花筏

高尾ひとみ

音もなく桜ひとひらづつ散れり
窓越しの雨に見てゐる残花かな

秋沙

雁木より見上げてゐたる朝桜
満開の桜の下に佇めり

あざみ

絶え間なく船の出でゆく花ぐもり
乾きたる猪のぬた場に花の散る

亜矢

陸橋に立ちて見下ろす桜かな
校門を覆つてゐたる桜かな

井藤希

一輪の花を落として鳥鳴けり
川縁を歩いてをれば花の雨

栄吉

桜咲くふと唇に県民歌
ふるさとに桜並木と天守閣

大橋博子

花便り手漉の和紙で届きたる
綿雲のゆつくり流れ朝桜

暁子

弥山嶺に日のあたりたる朝桜
抱かれたる赤ん坊の追ふ花吹雪

新庄憲彦

植樹して初の桜に生徒来る
気動車の川に桜を散らし行く

すみれ

ことのほかこの辺りが花盛り
姉とゆく桜吹雪の舞ふ園に

知佳子

父に似る耳たぶを持つ桜守
声もなく桜見てゐる夕べかな

ちどり

露天湯に姉と入るや花の昼
花の咲く山のふもとの墓へ行く

友岡紫山子

幼子のくるくると舞ふ花も舞ふ
ここからは流るるままに花筏

ふじ女

道塞ぐ意尽の風よ花の幕

山桜車窓の淡い雨の粒

松田裕子

花散らす雨に一村濡れにけり

傍に父母の居て花の頃

美耶

大桜賑はふ人の上に咲く

花吹雪舞ふ校庭に人の声

森口良樹

茶柱を見つめてゐたる花痕

しばらくは掃かずに置いて花の塵

綾乃

車椅子押して桜の窓辺へと

英一

花に遊び鳥が蕊まで切り落とす

遠藤さつき

白杖の人に譲りし花の下

大畑恵

退職の日につばいの桜かな

かこ

花は色持つて咲きたる日和かな

上島康子

母の手を引いて橋から花を見る

紀英子

回り道して見て帰る桜かな

熊谷ゆり子

石垣に刻印残る花の城

桑門わかこ

花の下そつと横顔見てをりぬ

白神陽子

山桜峽に三戸の残りたる

高嶋彌代

六十年ともに眺めし桜かな

民

花筏たどり着きたる潮目かな

ちかこ

さらさらと流れに乗りて花筏

津田玲子

花散りて景桜の影深まりぬ

撫子

一片の落花に鯉の寄りにけり

穂高

みどり児の花の枝へと手を伸ばす

幹

花便り写メで送って送られて

みさ子

川土手のそぞろ歩きに花吹雪く

宮田保江

哲学の道に沿ひたる花筏

やす保

武蔵野の野川に映る桜かな

山崎桂子

枝の鳥花を散らして飛びにけり

山野ウタ

花疲れ頬杖をつくテラス席

梅咲いて西に鋭峰望む村

奥日野に梅を咲かせる家多く

春の雨伯耆の山を隠しけり

頬白の来てゐる山の天気かな

春の山さつきの人のゐなくなり

昼月に近く来てまた囀りぬ

散つてゆく花に来てゐる水辺かな

止みかけてまた降る雨に囀りぬ

日の暮れて人ゐなくなる牡丹かな

公園に子の来てをらぬ若菜雨

佐保光俊

清明や高きに鳩の鳴いてをり

無住寺の薨を照らす春の月

洋館の出窓にシクラメン置かれ

自転車を凭せ掛けあり花水木

ひと雨に散つてしまひし牡丹かな

春深し川の流れを見てゐたり

川下に向けて針魚の遊ぎたる

川風にゆつくり揺れて藤の花

雨もよひ家並みに沿ひ燕飛ぶ

逃げ水を自転車の列やつて来る

村上正人

咲き満つる桜よ勤め最後の日

ひとときを花を眺めてすごしけり

咲き満ちて風に揺れたる桜かな

やすみなく雀の鳴ける桜かな

夜半には雨の上がりし大桜

川沿ひにゆけば桜の吹雪きけり

絶え間なき風に散りゆく桜かな

かたかごの花を見に行く朝の山

山道のゆくさきぎきに堇咲く

その村を遅桜見て歩きたる

高尾ひとみ

露かかる岸に檣の咲きにけり

川風に檣の花の揺れてをり

梅檀の夕べの空に咲き満ちて

ぶつかりて弾き飛ばされあめんぼう

釣舟を繋ぐ川岸蘆茂る

川風に樟の青葉の戦ぎたり

どくだみを刈れば濃き香の漂うて

踏石に絡まつてゐる蟻の列

若竹の皮を纏ひて伸びにけり

竹の皮纏ひて伸ぶる今年竹

秋沙

春の夕繩跳びの子を見てをりぬ

景桜の木洩れ日を受け歩きたる

鉄線のひとつ開きぬ窓の下

裏山は露につまれ不如帰

露剥いてはや昼どきとなりけり

掌に三粒の蒺藶せにけり

田植機の植をゆく列を見てゐたり

父植ゑし山紫陽花は海を向き

港湾に沿うて走れる印波かな

待ち合はす駅前広場夕薄暑

あざみ

城跡の落椿踏み巡りたる

ゆつくりと二羽の進める春の鴨

若草の匂うて平和大通り

木の下に鹿の群れたる日永かな

全開のピアノを弾いて蝶の昼

骨折の友に短文書く遅日

暮の春抱ふる母の重たくて

少年の寝顔見てをり春の月

子の弾ける「子犬のワルツ」夏はじめ

あめんぼうしばし終まり離れたる

亜矢

春の日に照らされてゐる石仏
山々の遠くに見えて黄砂降る
花の雨土蔵の壁を濡らしたり
寺の鐘聞こゆる山の残花かな
坂道に桜葉降る午下り
群雲を見上げてゐたり春の夕
花水木小雨の止まぬ通りなり
ゆすらうめ道に落とせる雀かな
卯の花の前に手水の柄杓置く
竹林の倒木見ゆる夏の山

井藤希

夕方の庫裏の灯りて雪柳
ベランダに置かれてゐたる巣箱かな
休日の小学校に鳥交る
海のほか過ぎゆく船を数へたり
春夕焼なにやら鈍き船の音
薔薇一輪はみ出してゐる垣根かな
小判草さはつて帰る雨上がり
廃屋と思へど枇杷の袋掛け
柵越しに素手で触れたる若葉かな
初夏の杣道行けば塔のあり

栄吉

裏木戸を押す音のして花の風
庇打つ音のはげしき花の雨
いち早く山家は暮れて花は葉に
一陣の風に降りたる夏落葉
砂浜を洗ふ四月の波の音
筍の甘き匂の飯の噴く
門柱に薔薇をからませ夜の雨
棒切を杖に青葉の山登る
ものの影よぎる夏日の山の道
沢音の近くに露を採りにけり

大橋博子

春時雨カフエに紅茶を待ちをれば

春の暮向うの畑に人の影

湿りたる風の吹きけり夕蛙

参道はせせらぎに沿ひ花楓

石楠花の崖に聞こゆる水の音

せせらぎを渡り近づく杜若

谷ごとに風の吹きけり花菱

景桜の影濃くなりて母校かな

竹皮を脱ぐや谷から水の音

夕暮の川に風立ち夏あざみ

暁子

残雪の畑の隣へ木津軽かな

草萌ゆる三内丸山遺跡かな

阿賀野川の底石見ゆる雪解水

雪解川遡れども悠々と

柳の芽流れは深く早きかな

初桜頂き白き鳥海山

花水木両手を振つて別れたる

つばくらめ市電ゆつくり進みたる

散る桜母屋も蔵も赤瓦

初夏の庭に半月見てゐたり

新庄憲彦

大杉に絡まり上る藤の花

熊ノ蜂羽音大きく藤に来る

岩山を夕日の照らし春惜しむ

筍を握る子の声の響きをり

景桜の蔭の木椅子に腰下ろす

鯉幟田んぼの畦に立ててあり

村人と話してをれば時鳥

朝の雨に濡れてあやめの咲きにけり

銀輪の背中に卯の花腐しかな

五月晴前を銀輪通りたる

すみれ

鳥とまるたびに揺れたる初桜

夕桜灯りを点す山家かな

鰯刺の影のみるみる近づきぬ

景桜のしきりに揺るる朝かな

翡翠のいま過りたる川辺かな

花樽ときをり雨を散らしけり

今日もまた夏の蝶来る午下がり

遠山を露の覆ひてほとどぎす

たわいない立ち話する薄暑かな

夏の雨棚田一枚ごとに降る

故郷の道路の端を雉走る

故郷の薊を夫の持ち帰り

夫の握る蒜納屋に吊るしたり

玄関に母は芍薬生けにけり

一晚に仏間の牡丹開きたり

玄葵りハビリの父見舞ひたる

田植機之父に手をふる女の子

故郷はいつも草刈る音のして

川土手の草刈る夫や夕間暮

母が家へ青田の道を戻りけり

ふり向けば後ろに花と宵の月

書くために拭ふ食卓花曇

ベランダの椅子に囁り聞いてをり

一日を風と遊びぬ更衣

滅びゆく城のごとくに牡丹散る

杜鵑花切る夫は背子を丸くして

花菖蒲つばみの中の濃紫

ハンドルを握りて茅花流しかな

落下せし南天の花掃きにけり

峠越えくねくね坂の夏薊

知佳子

ちどり

友岡崇山子

景桜を見極めてから踏むべタル

子供の日ケーキの名はジュビター

人間の視力を超えて夏霞

カーネーション好き嫌いなく売られおり

母の日にラジオの美談なんとなく

豆飯の茶碗並べて湯気の森

花びらが花びら呼んで薔薇になる

赤い薔薇私をお飲みとある薬

お寿司屋の傘があちこち向いて梅雨

列車過ぎ電光変わり五月雨

ふじ女

つばくらめ狭き家並を突つ切つて

藤の下送迎バスを待つ親子

囀と瀬音の絶えぬ山に来る

窓開けて二階から見る花水木

二階へと木香薔薇の咲き上る

麦秋の讃岐平野を夫とゆく

カーテンのさわさわ揺れて梅雨に入る

薄暑かな海は沖ほど煌めいて

自転車が自転車抜いて薄暑光

夏木まぎんぎの雨のなか歩く

松田裕子

初蝶の海風に飛び流さるる

花筏ときどき鯉の見え隠れ

水口に寄つては落つる花筏

景桜の奥よりピアノ聞こえたる

古寺の庭先に見る牡丹かな

雨つづき栗の花の香してをりぬ

老鶯の時折り聞こえ坂の上

母の日に紫陽花の鈴届きけり

はとぎす朝日の先に聞こえる

石楠花の咲く道父と歩きたり

美耶

豆の花ひねもす母は畑に居り

たかんなの日蔭の土を盛り上げて

薰風や湖面に映り逆さ富士

沓石の周りに踊子草咲いて

退院のあとの饒舌青嵐

五月雨の寛の音の夜もすがら

草刈の空に一羽のとんび舞ふ

青簾卷けばかすかに瀬音して

日照り雨見上げてゐたる夏帽子

朱の鳥居置かれてゐたる木下園

森口良樹

えびね蘭庭の木蔭に咲いてをり

春嵐水平線の波立ちて

父母の墓うぐいすの声聞こえけり

脱藩の士の越えし道山笑ふ

目に沁みる若葉の土佐路ゆきにけり

野苺の花の香れる昼餉とき

どくだみを煎じて飲むと摘みしかな

夜更しの眠れぬ夜の不如帰

不如帰遠くの山で鳴いてをり

大畑恵

江波山の坂道は花盛りなり

白粥を母に炊きけり花の朝

華儀待つ時を咲きをり八重桜

経蔵の鏝絵の鯉や夏来る

緑さす階に座りて夫を待つ

芍薬の時を待たずに咲いて散り

ゆりの木の花に気づかず通り過ぎ

薄暗き空に芭蕉の玉解きぬ

揺れやすき令歎の花見る厨かな

桑門わかこ

剪定の八十歳の夫支ふ

近づいてしばし見てゐる花水木

朝朝に水を替へたる薔薇の花

薔薇の花ハサミ突つ込み手入れする

箒持ち薔薇の花びら掃き集む

大小の薔薇が花瓶に活けてあり

絹莢はそうつと引いて筋を取る

絹莢の卵とどにて今日の昼

卵の花の側をゆつくり歩きたる

宮田保江

海胆割れば鷗寄り来る浜辺かな

船着場跡に祠や夏柳

朝焼の雲の広がる早さかな

木洩れ日の差し込む窓辺レース編む

石楠花の小道に人と擦れ違ふ

山裾の紫陽花見ゆる茶店かな

両の手で包む螢に水匂ふ

ナイターのスコアボードの見ゆる窓

二重虹架かる辺りは母の里

山野ウタ

採つて来て両手に匂ふ木の芽かな

たんばばに思はずかがむ試歩の道

巢作りの鴉の唾へ長き紐

よく笑ふ少女のえくぼ牡丹咲く

床の間の座して見てゐる杜若

両の手に包み込みたる白菖蒲

ドライブの疲れを癒す夏薊

独り居に慣れて匂作の夏座敷

白神陽子

みどりの日ラ・カンパネラ聴いてをり

夏落景屋根に積もりて空家かな

山上湖訪へばひと隅菖蒲咲く

三瓶山の山開へと承らはん

夏藤のうすうす谷を覆ひけり

下がりきて蜘蛛はノートをうろうろと

壁覆ふ蔦の青景の甲子園

くにぐにの兵士の墓に花の降る

甘夏を供へし地蔵に瀬戸の風

桜漬け載せちらし寿司配膳す

筍の握られしままの竹林や

つと針を外せる鱧の口の澄む

八十路なる患者泣きたり聖母月

献血を済ませし人の氷菓食ぶ

校庭のトラックの外草青む

雲行きて御室の桜満開に

ひと枝に群がり柴井吉野咲く

生け花に花のひと枝切つてゆく

一陣の風の吹きたる花筏

病得て畑一面の虞美人草

才へを待つ我が身もの憂き春の宵

阿姫

綾乃

英一

軒下につばくろの来る祖母の家

つばくらめ若き日の歌口ずさむ

景桜や少年の目のまつすぐに

ほととぎす読みたき本を思ひ出す

登山道いづこに鳴くやほととぎす

遠藤さつき

市街地の鳩に紛るる頬白よ

景桜を見上げて墓に参りたる

景桜の上に雀の声のして

ほととぎす啼くや木立に日の差して

愛鳥日インコの写真飾りたる

上島康子

げんげ田の吾子の歩みに令せたる

景桜や国分尼寺へ続く道

新樹より鴉の一羽飛び立てり

ほととぎす礎石の光る廃寺跡

ふだん着に赤のペディキュア梅雨に入る

撫子

景桜のまぶしき坂を上りけり

不如歸まどろむままの夜明かな

初咲きの紅薔薇一枝剪りし朝

深々と竹の落葉の峠道

菜を洗ふ籠に見つけててんと虫

やす保

子供時代母の田舎でべらを釣り

堤防の上で月見て夜釣かな

魚屋も無くなり蠅も居なくなり

好きな人に薔薇を贈る夢を見て

阿波久

一票を投票に行く余花の坂

景桜の先に裸婦像置かれあり

あぢさるを剪れば雨粒こぼれ落つ

雨止みて桐の花へと日の差せり

熊谷ゆり子

景桜や小さき砂場に小さき山

景桜の枝あちこちへ伸びるたり

景桜や石に腰掛け休みたる

景桜や石のベンチの濡れてをり

景桜の並木の下に風の吹く

景桜の影あをあと川面かな

夫につき上る坂道ほととぎす

景桜のさわさわと空暮れなづむ

降りつく雨に倒れし薔薇支ふ

父の日の祖父と父と子ボール蹴る

雛罌粟の揺るる中央分離帯

梅雨晴間二三度回す洗濯機

高嶋 頌代

民

穂高

この辺りことに蛙の鳴きしきる

石楠花を活け玄関の華やぎぬ

新緑を抜けて視界の広がりぬ

紀英子

球場の上に満月夏来る

景桜に学生服の子が二人

新緑に保母さんの歯の白きかな

ちかこ

囁に仕事を止めて聞き惚るる

コロナ禍の厳しき夏の来りけり

景桜の蔭を選びて子の座る

津田玲子

犬遊ぶ田の一面にクローバー

朝練のシュートを打つて若葉風

宅配の自転車走る街薄暑

幹

景桜をすうと抜けて午後の風

景桜の校庭の隅九九覚ゆ

景桜の時をり風にさやぎたる

みさ子

春の暮送別会の予約せり

景桜やジャングルジムに基地づくり

景桜や順番待ちのカフェの前

山崎桂子

甘夏は部屋いつばいに香りたる

梅雨晴間洗濯物を干す日なり

かこ